

Stephen Crane の作品に見る〈日本（人）〉イメージ

——19世紀末米国の社会文化政治的視点から——

増 崎 恒

Stephen Crane and “Japan/ese” Imagery : A Socio-Cultural-Politico Relationship

Ko MASUZAKI

は じ め に

1893年、米国イリノイ州シカゴで万国博覧会が開催される。当時の米国全人口の約3分の1に相当する2,147万人以上の入場者を会期中に迎えたと言われる（大井3）。米国中がこの万博に沸いた。日本にも万博への出展の招待状が届き、明治政府は他の諸外国を凌ぐ巨額の資金を投じて外国館の1つとして、宇治の鳳凰堂を模した「日本館」を建造した（大井7；Rydell 48）。当時の駐ワシントン日本大使は、明治政府がこの万博にかける意気込みには、「米国と日本の商業的結びつきを強化」する、「日本が諸外国と肩を並べるに値する国家であることを証明」する、意図があったと述べている。対して、万博を主催する米国は日本を歓待した（Rydell 48-49）。結果として、「日本館」は「米国全体」へ「日本建築」を宣伝する最初の好機となったとされる（Appelbaum 74）。これらの事象を勘案すると、この万博において「日本館」が象徴する〈日本（人）〉が当時の米国人の高い〈関心〉を引いたことは想像に難くない。

米国の自然主義作家 Stephen Crane（1871-1900）は、同時代19世紀末米国の現実、特にニューヨーク市内のスラム街とその住民「移民」たちをリアリズムの手法で描いた。万博開催の年に、ニューヨーク市内のスラム街と移民の生活を主題にした第1作 *Maggie: A Girl of the Streets* が発表される。作品に添えた献呈文の中で、当時の中産階級読者（その大半は当時の米国社会の体制派を構成していた〈ワस्प=White Anglo-Saxon Protestant〉）に、スラムという「環境」の力に翻弄されて最後には娼婦になり自殺する移民の子女、女主人公 Maggie への同情を呼びかける（Wertheim and Sorrentino: 1988, 53）。この献呈文を根拠の1つとして、Donald B. Gibson などの批評家たちは、19世紀末米国社会における〈弱者〉たる「移民」の側に立つ

作家と Crane を評価する (Gibson 27)。筆者はこれまで、文化研究的アプローチを用いて、19 世紀末に書かれた雑誌記事をはじめとする諸々の文書とその時代を映す鏡として精査・詳読し、それらと Crane のテキストを照合する作業を行ってきた。それを通して、Gibson 的な Crane 像を解体し、旧来的な枠を超えた多層的な作家像を再構築することを試みてきた¹⁾。

Maggie の中に、スラム街に暮らす移民たちを客層とした演芸場の場面がある。そこに、作家は「小柄で太った男」(a small fat man) を登場させる。この男は、この場面にししか出てこない。物語の本筋とは無関係な端役である。しかし、“He made his face into fantastic grimaces until he looked like a pictured devil on a Japanese kite.” と、この人物は「日本の凧」とのアナロジーで語られる (24 下線筆者)。Crane もまた同時代米国人の 1 人として「日本（人）」に無関心ではあり得なかったのではないか。小論では、この仮定に基づき、従来ほとんど注目されてこなかった「Crane と日本（人）の関係」を取り上げ、作家が描く〈移民〉の背後にどのような日本（人）イメージが透けて見えるか（透かし見ることが可能か）を探る²⁾。19 世紀末から 20 世紀初めにかけて、アジア系黄色人種に対する人種差別言説「黄禍」(yellow peril) が米国を席卷する (飯倉 9, 27)。この言説を視野に入れ、同時代米国において社会文化政治的に生成された〈日本（人）〉像の変遷、それと作家の間の距離についても合わせて論じる。小論を通して、Crane 作品解釈、〈移民〉に向けられた作家の眼差し、のさらなる振幅の可能性を呈示したい。

1. 19 世紀末米国における〈日本（人）〉イメージ

Crane 作品に見る〈日本（人）〉表象、その意味を論じる前に、作家が活動した 19 世紀末米国においてどのような〈日本（人）〉イメージが流布、変遷しつつあったのか見ておきたい。

1841 年、中産階級向けの雑誌に掲載された新刊案内は、*The Natural History of Society in the Barbarous and Civilized State: An Essay toward Discovering the Origin and Course of Human Improvement* という書物の書評を掲載している。新刊の表題が示す通り、「未開 (barbarous) / 文明 (civilized)」を軸に、人類の「進歩」(improvement) の足跡に焦点が当てられる。書評はまた、この書物が読者の「興味」を引きつけるものであると指摘する (Rev. 401 下線筆者)。〈未開〉から〈文明〉へと至る〈人類の進歩〉という話題が当時の米国社会で注視されていたことがうかがえる。書評は一方で、白色人種より「身体的」、「知的」に劣った人種として「黒人」(Negro)、「マレー人」(Malay)、「モンゴル人」(Mongolian) を挙げている (Rev. 401)³⁾。米国の主流派をなす白色人種、特にアングロ・サクソン系で構成された〈ワスプ〉、の優越感をくすぐるこの書物と〈日本（人）〉イメージは無関係ではないように思われる。というのも、1872 年に雑誌に掲載された日本特集記事は、“The characteristics of the present race [Japa-

nese] indicate both Malaysian and Mongolian origin.” と、「マレー人」と「モンゴル人」を日本人種の血統として挙げる (“Awakened” 670 下線筆者)。日本人がワспよりも劣っていると捉えられていたことは明白であろう。「ある若いニューヨーク人」(a young New Yorker) による訪日体験を綴った 1868 年の雑誌記事も同様の日本人観に基づく。日本人は “jabbering Japs” と表現される (“A Visit” 103)。jabber は、「猿や鳥などがキャッキョと鳴く」という意味を持つ (“Jabber”)。また、Jap は、日本人に対する「強い軽蔑的な」意味を内包する (“Jap”)。実状は、日本人同士が喋る日本語をこの若いニューヨーク人が聞き取れなかっただけであろうが、記事中の表現は「日本人＝劣等人種」とする当時の一元的な図式を踏襲する。1868 年は明治元年、1872 年は明治 5 年。劣等国として〈日本〉は当時米国からみなされ、イメージ化されていたのである。1872 年の記事はその一方、〈日本〉が近年初めて、米国人の「関心」(interest) の対象になってきていると指摘しめる (“Awakened” 669)。この指摘を傍証するように、1880 年の雑誌記事には、コミカルな物語風の挿絵が掲載されている。その中で、「立派な新品の日本の鳥凧」(nice new Japanese bird-kite) を揚げて遊ぶ米国白人少年の姿が描かれる (“Editor’s Drawer” 640)。

〈日本〉のイメージが警戒するに値しない〈安全〉なものとして定着し、米国社会で認知度を得ていく反面、同じ東アジアの隣国隣人「中国(人)」に対する米国の反応は著しく異なっていた。米国のジャーナリスト兼作家 Ambrose Bierce は、1881 年に *Wasp* 誌上で「中国人」(Chinaman) に言及して、米国社会に広がる「貧困」は(増え続ける)中国人労働者に起因し、故に法律で彼らを雇用禁止にすべきだと声高に主張する (“Chinaman” 35)。労働問題に加えて、黄色の農民・移住者(中国人)たちによって、白人が支配していた土地が奪われるのではないかという不安は 1882 年の「中国人排斥法」によって頂点に達し、以後中国人の米国への移住は禁止される(グリーン 97; ゴルヴィツァー 19)。1890 年、米国のジャーナリスト Jacob Riis が著したスラム・ルポルタージュ *How the Other Half Lives* によって、ニューヨーク市内のスラム街にある中国系移民共同体(チャイナタウン)の実態が米国中産階級読者の前に突きつけられる。Riis は、自著の第 9 章 “Chinatown” において、中国系移民の生活様式、彼らの日常風景を描き出す。中国系移民の抱える窮状に共感し彼らが米国社会に同化できる道を探りながらも、つまるところ米国社会にとって、「産業問題」(industrial problems) を引き起こす、「脅威」(menace) となる「決して好ましくない集団」(in no sense a desirable element)、 「異分子」(stranger) であると、彼らを Riis は見る(83)。当時、中国系移民共同体は「アヘン」(opium) のイメージで捉えられてもいた。Riis もまた中国系移民と「アヘン」の関係について言及する(78)。1883 年の *Frank Leslie’s Illustrated* 紙には、「アヘン狂い」 (“Crazed by Opium”) と銘打たれた挿絵が掲載されている。挿絵は、白人女性の間蔓延しつつある〈アヘン中毒〉状況が引き起こした社会恐怖、その要因としての中国系移民、という当時の短絡的

な図式をイメージ化している (Anbinder 414)⁴⁾。

中国系移民が米国社会に及ぼし得る「脅威」。その脅威排斥の必要性。これは、中国人の〈肥大し過ぎた流入〉に象徴される「外国勢力の膨張」に加えて「中国人＝アヘン中毒者」という偏見によって増幅された〈米国社会不安〉の発露、もっと言うなら、ワズプに代表される「白色人種の黄色人種に対する恐怖、嫌悪、不信、蔑視の感情を表現した」人種的差別の「黄禍」(Yellow Peril) 言説の発露、として理解できよう (ゴルヴィツァー 18; 橋川 7)。なるほど、Riis のルポルタージュが刊行された 1890 年の時点で米国内に日本人 (日系移民) はわずか 2,000 人しかいなかったのである (グリーン 98)。〈中国人嫌悪〉、対照的なく日本人ひいきの根幹にこの言説があることは否定しない。しかし、米国をはじめとする〈西洋文明〉を導入した「日本」に対してそれを拒絶した「中国」という〈事実〉もこれに深く関与していたと推察される。1872 年の雑誌記事「日本の目覚め」(“Awakened Japan”) は、「日本人」を「猿」扱いした 1868 年の雑誌記事とがらりと論調を変えて、〈古い日本〉の門扉を開き、眠りから〈目覚め〉させ、「新しい日本」(new Japan) を作るのに寄与したのはアングロ・サクソン民族であり、特に米国によって「文明」(civilization) が日本に導入されたことに拠るところ大である、と誇らしげに書き連ねる (671)。論旨は違えど、米国文明〈日本文明という不等式は依然として露骨に鎮座する。同様の不等式は、1895 年の雑誌記事からもうかがえる。日本の文明化 (近代化) に果たした、米国を含めた諸外国の役割はここでも再度強調される (Herbert 697)。一方で、中国は、米国でベストセラーとなったユートピア小説 *Looking Backward* (1888) において、米国を含む「西洋文明」(our Western Civilization) の受け入れを「拒絶」した国家として言及される (Bellamy 45)。日本は西洋文明の教授を受け、中国はそれを拒否した。ここにも両者の差異がある。

こうした背景の下、1893 年にシカゴで万博が開催される。万博は、コロンブスによるアメリカ大陸〈発見〉400 周年を記念するとともに、「米国の進んだ文明」(our advanced civilization) を内外に誇示し、それを作り上げた米国人の「新たな誇り」(new pride) を再認識させた (“Editor’s Study” 799, 802)。先に見たように、日本は万博開催に際して厚遇され、「外国館」の 1 つとして「日本館」を出展することが許可される。これには、日本をここまで〈育てた〉という米国の自負はむろん、日本芸術を特集した 1890 年の雑誌記事に顕著な「葛飾北斎」、及び北斎に代表される、芸術分野における成熟した「日本文明」(Japanese civilization) に対する米国からの礼賛、1892 年に雑誌に掲載された日中特集記事における「完成された日本芸術」(the perfected arts of Japan) 称賛などもまた好意的に作用していたと思われる (Fenollosa 774; Winslow 350)。対して、中国は、外国館扱いではなく、それより格下の見世物・娯楽的要素の濃い「ミッドウェイ・プレザンス」(Midway Plaisance) と呼ばれた、会場の一画に「中国村」(Chinese Village) を出展するにとどまる (大井 7; “Side Shows” 155)。

日本に対する歓待も長くは続かない。万博の翌年 1894 年 8 月から 1895 年 4 月にかけて、朝鮮半島の覇権をめぐる日本と中国（清）が「日清戦争」（Chino-Japanese War）に突入する。戦争は日本の勝利で終わる。1895 年の *North American Review* 誌に掲載された、米国海軍長官による日清戦争特集記事からは、日本に対する米国の見方が一変したことが読み取れる。この勝利によって日本は一気に「列強」（the great nations of the earth）の仲間入りを果たす。小国日本の台頭は「仰天の事実」（startling fact）と米国人に受け止められ、日本は注視すべき対象へと転じられる。「驚くべき進歩」を遂げつつある日本。記事は最後に、起こりうる「緊急事態」に対して備えが必要であることを米国人読者に説いてもいる（Herbert 685, 698）。遼東半島の返還を日本に迫る、日清戦争直後の独仏露による〈三国干渉〉に参加せず、米国は中立の立場を取って傍観した。しかし、東アジアに監視の目はしっかりと向いていたというわけだ。これまでは、欧州諸国でも米国でも、東洋で何か事件が起こった場合、その時々に関心を示す程度に過ぎなかったのが、日清戦争以後、中国や日本の問題に対して絶えず注意が払われるようになった。また、この戦争に引き続いて「黄禍というスローガン」が広まっていく（ゴルヴィツァー 41）。

この動向を裏打ちするかのよう、当時の中産階級向けの雑誌に東アジア特集記事が頻出する。一例を挙げると、1896 年の *North American Review* 誌掲載記事「東アジアにおける米国の関心」（“America’s Interest in Eastern Asia”）、1899 年の *Atlantic Monthly* 誌掲載記事「中国分割とそれに対する米国の関心」（“The Break-Up of China, and Our Interest in It”）。記事双方の表題に共通するように、「米国」は今や、日本・中国を含めた「東アジア」一帯を自国の「関心」（interest）、それも「利益」（interest）追求型の〈関心〉の射程に入れつつあるのである。さらに、これらの記事は、日本と中国それぞれの力関係が逆転したことを強調している。「さらなる進歩」（further improvement）への道を着実に歩んでいく「日本」、後退の一途をたどる「中国」（Barrett 265）。「列強国」（the council of Powers）の一員となった「日本」、「無力感」（helplessness）に沈溺する「中国」。こうした中、“The Yellow Peril bogey was transferred to Japan [...]” と記事は述べ、「黄禍」言説内の黄色人種の指示対象もまた、「中国人」から「日本人」へとスライドしていく（“The Break-Up” 276–77）。日本（人）に対する米国の関心の中身は、「黄禍」を通して人種差別的意味合いをも帯びてくるのである。

黄禍言説に関連して、1900 年に *North American Review* 誌に掲載された記事「黄禍の商業的側面」（“Commercial Aspect of the Yellow Peril”）を取り上げたい。表題が示すように、〈黄禍〉と〈商業〉の関係をめぐる当時の社会状況を直接的に報告することに記事は特化している。“we (I address chiefly American and British readers)” と、記事が意図する読者層「米国・英国（中産階級）読者」に向けて、黄禍と商業の未来の展望を〈英米中心主義＝アングロ・サクソン民族中心主義〉的な視点から記事は語る（Ireland 390 括弧原文）。とりわけ、〈起こり

得る〉中国の将来的な進歩進捗が世界に及ぼす「切迫した大問題」(great and urgent problem)として、中国が将来膨張した際、英米をも巻き込み世界経済に大きな影響を及ぼすのではあるまいか、「膨張した中国」が新たな市場を求めて既得市場に参入してくるのではないかという疑念を投げかける(398-400)。ここにおいて、商業主義的な観点から、黄禍の指示対象が「中国（人）」へと再帰する。しかし、この黄禍言説の展開の背後にはさらに一捻りがある。補助線として、米国の東洋美術史家 Ernest Fenollosa による、1892年の *Atlantic Monthly* 誌掲載記事「中国人と日本人の特質」(“Chinese and Japanese Traits”)を挙げる。Fenollosa は、“Yet a comparative biography of these two racial lives [of Chinese and Japanese] would exhibit the closest affinities between them.”と述べ、「中国人」と「日本人」の間に「極めて近い類似性」があると指摘する(769 下線筆者)。民族・人種系統上の差異を度外視した〈中国人／日本人〉類似言説が当時の米国社会にある程度浸透していたと仮定できる。とすれば、19世紀末米国において、中国人と日本人は差異化される一方で、黄禍言説の裏で自家撞着的に「中国人＝日本人」と等号で結ばれていったのではないか。1900年の雑誌記事「黄禍の商業的側面」は〈中国の(起り得る)将来的な膨張〉を危惧しながら、その内ではその懸念の対象を〈日本〉にすり替え、新興国日本に対する警戒交じりの関心をも米国中産階級読者に喚起していたと推察される。

19世紀末米国社会において、〈日本（人）〉イメージは、〈劣等国家・未開民族〉に始まり、中国系移民を悪の権化とみなす「黄禍」言説を経て、対照的に〈安全〉な国家・民族として好意的に受容され、芸術分野においては高い評価を受ける。しかし、日清戦争(1894-95)における日本勝利という〈予期せぬ〉事態を通して、米国の警戒交じりの関心の対象になる。「列強への仲間入り」を果たすや、潜在的な脅威としての中国のイメージと重ね合わせられつつ、中国に代わる、黄禍言説に培われてきた〈負のイメージ〉を帯びた〈危険分子〉として日本(人)は再イメージ化されるのである。

2. Crane 作品と〈日本（人）〉

〈日本（人）〉イメージが米国社会において流布、変遷する只中で Crane は著作活動をした。本節では、①Crane 作品と「印象主義的技法」、②Crane 作品に見られる「日本」への言及、③スコットランド系カナダ人ジャーナリスト James Creelman と Crane の交流の可能性、という3つの視点から、Crane 及び彼の作品が〈日本（人）〉の影響を受けていることを論証する。

1897年12月、英国の小説家 Joseph Conrad は Crane に宛てた書簡の中で、“You are a complete impressionist.”と、Crane を「印象主義者」(impressionist)と呼んでいる(Wertheim and Sorren-

tino: 1988, 315)。1980年、批評家 James Nagel によって *Stephen Crane and Literary Impressionism* という一冊の Crane 研究書が出て、Crane 作品の文体と印象主義の関連性についてまとまった研究が進んだ。1995年には、押谷善一郎氏による、Nagel の研究成果を補完し、Crane の印象主義的技法をさらに考究する研究書が出版される。「フランス印象派の出現とその理念・技法についての知識を、このようにさまざまな形で学ばなかったとしたら、いかにクレインが生まれつき優れた色彩感覚に恵まれていたとしても、彼のユニークな印象主義的技法は生まれてこなかったといっても過言ではあるまい。」と押谷氏は断じ、Crane がフランス印象派画家の影響を受けていたことを指摘する (35-36)。Nagel は、Crane が文体における印象主義的技法を確立していく上で重要な役割を果たし得たソースの1つとして1892年に *Atlantic Monthly* 誌に掲載された記事「フランス印象主義に関する覚書」(“Some Notes on French Impressionism”) を挙げる (157)。この記事は、印象主義とは何か目新しいものであり、目下のところ「理解よりも議論」(more discussed than understood) の対象になっている、また、印象主義の原理は「日本美術の影響」(the influence of Japanese art) を受けていると書き記している (Waern 535, 537)。美術史上、フランス印象派が日本美術の影響を受けていること、特に日本の浮世絵版画がフランス印象派の成立に多大な貢献をしたことは今日定説となっている (大島 9; 馬淵 106)。ということは、フランス印象派画家の影響を受けたであろう Crane が、間接的に日本美術の影響をも受け、〈日本(人)〉に対して何らかの関心を持った可能性は無視できない。

Crane 作品を通して、「日本」が単語のレベルで明示される箇所はおそらく一箇所ではないかと思われる。先に見た、*Maggie* における演芸場の場面である。“He made his face into fantastic grimaces until he looked like a pictured devil on a Japanese kite.” と、端役登場人物を描写する際に「日本の凧」が比喩の一部として用いられる (24 下線筆者)。この凧について、これ以上何の言及もない。また、この凧に描かれる「悪魔の絵」(a pictured devil) をどのようなものとして作家が理解していたかも不明である。日本の凧には、浮世絵版画調の「悪魔(鬼)」が図柄としてしばしば描かれた。加えて、当時の米国をいわゆる〈印象主義ブーム〉、〈日本美術礼賛〉といった社会風潮が取り巻いていた。「日本の凧」に対する作家のこの言及からは、「日本の」と「悪魔(鬼)の絵」という二重の位相で作家の〈日本〉に対する高い関心が透けて見える⁵⁾。*Maggie* の続編の色合いの濃い中編 *George's Mother* (1896) において、作家は主人公 George の部屋を描写する際、“Occasional chromos were tacked upon the yellowish walls of the room.” と、壁に留められた「着色石版刷りの絵」(chromo) を焦点化する (1: 121 下線筆者)。この絵に関して、これ以上は何の言及も説明も作家は加えない。葛飾北斎を礼賛した 1890年の雑誌記事の中で、日本美術の一つとして「着色石版刷りの絵」(chromo-lithographs) が紹介されている (Winslow 353)。chromo-lithograph の短縮形は chromo である。George の部屋の描写の中にさりげなく登場する「着色石版刷りの絵」もまた「日本」に対する作家の興味の程

度を示す指標として見ることができよう。合わせて、「日本の風」、「着色石版刷りの絵」双方ともそれ以上進んだ説明が作品から脱落していることにも着目したい。この欠如は逆説的に、当時の米国中産階級読者（ワズプ）と作家の間でこれら〈日本趣味〉が共通の了解事項になっていた事実を示唆する。

フランス印象派の影響を通して間接または直接的に「日本美術」に触れたかもしれない Crane は、自作品中に「日本」的な小道具を散配する。作家自身は、〈日本（人）〉をどのように捉えていたのだろうか。ジャーナリスト Creelman と Crane の関係から、作家の日本（人）観を探ることができるように思われる。1894年に、*New York World* 紙の記者として Creelman は日清戦争取材する。同年の Crane と言えば、*New York Press* 紙にニューヨークを扱った諸記事を寄稿していた頃である（Wertheim and Sorrentino: 1994, 69）。Creelman は、*New York Journal* 紙の記者として、1897年にギリシアへ、翌1898年にはキューバに赴く。ギリシアとキューバで、同じ *New York Journal* 紙の記者として現地に派遣された Crane と、親しい間柄ではなかったが、行動を共にする（Wertheim 77）。こうした経緯を踏まえるならば、〈ニューヨーク〉、〈ジャーナリズム〉という点で共通項をもつ Creelman を媒体として、Crane が「日清戦争」について、すでに1894年の時点で直接・間接的な情報を得ていた可能性は低くない。日清戦争、その勝利、続く小国日本の台頭が当時の諸雑誌に特集記事を組ませ、日本を黄禍という言葉の中で注視すべき〈脅威〉へと転じたことはすでに確認した。Crane にも「日本（人）＝脅威」とするイメージが刷り込まれていったのではなかろうか。

以上の考察・検証を通して、作家もまた同時代的な〈日本（人）〉イメージの影響下にあったことがより明白になったように思う。自作品において展開された「印象主義的技法」が日本美術の恩恵を大いに被っているという事実を作家自身が認識していたであろうこと、作家自らの手による自作品内への〈日本〉的な事物の配置、ジャーナリスト Creelman を通して「日清戦争」を〈知った〉であろうこと、が浮き彫りになった。Crane は、1890年代の米国にあって、1893年のシカゴ万博出展に際しての日本優遇、万博翌年の日清戦争を大きな転回点として高まる日本への警戒心、〈黄禍としての日本（人）〉イメージの浸透、その中で同時代米国人と同様に、日本に対して正／負の感情の狭間で揺れていたと考えられる。

3. Crane の〈日本（人）〉表象に見る政治性

揺れる Crane の〈日本（人）〉観は、どのような形で自作品内に投射されたのだろうか。本節では、ニューヨーク市を舞台にした Crane による物語、1894年12月9日付の *New York Press* 紙に掲載された“The Duel That Was Not Fought”を主として論じる。物語中に出てくる「キューバ人」に光を当て、このキューバ人にどのような〈日本（人）〉イメージが重ね合わせら

れ得るかを考察する。その際、Crane による他のニューヨーク作品、及びキューバを舞台に米国とスペインが覇権を競った米西戦争（1898）を作家自ら取材した戦争記事などにも目を向ける。〈日本（人）〉イメージという観点から「キューバ人」登場人物を再解釈する作業を通じて、Crane の〈日本（人）〉表象に潜む政治性、その揺れを探る。

“The Duel” は、ニューヨーク市内の酒場を舞台に、スラム街の無法者 Patsey Tulligan と「細くて小柄なキューバ人」(a slim little Cuban) の間で起こった、〈行われなかった〉決闘騒ぎの顛末を描く。この両者に加えて、「2人の身だしなみのよい紳士」(two well-dressed men) が物語には登場する。三者を中心に物語は進行する。まずは、この「キューバ人」について詳しく見ていきたい。彼は、“a slim little Cuban with miraculously small feet and hands” と人物描写され物語舞台に登場する（8：353 下線筆者）。little や small という形容詞を伴うことに注目したい。このキューバ人の「小ささ」は、作品全体を通じて“the little finger”、“this little man”、“de little Dago”、“the little Cuban”、“[the Cuban’s] little body”、“little black Dago”、“little dirty picter [picture]” と、反復強調される（8：354, 355, 357, 358）。「小ささ」に加えて、このキューバ人は、激昂した Patsey によって Dago とくり返し呼び表されもする。ニューヨークで刊行された *Encyclopedia Britannica* 第11版（1910）によれば、Dago とはその当時、「スペイン、ポルトガル、イタリア人水夫」に対して用いられた〈蔑称〉で、米国では「貧しいイタリア系移民」に対して一般的に用いられた（7：730）。Patsey の感情の高ぶりからすれば、このキューバ人が Dago という〈蔑称〉で罵られることは、物語の文脈上納得できる。また、このキューバ人は“olive face”をしている（8：354）。*Longman Advanced American Dictionary* によると、「オリーブ色の肌」(olive skin) は、ギリシア、イタリア、トルコといった地中海沿岸の国々の人々に顕著に見られるという（“Olive”）。同じ地中海沿岸の国スペインの支配下にキューバは1894年当時あった。このキューバ人登場人物はひょっとしたらスペイン人との混血だったのかもしれない。あるいは、キューバ人が当時置かれていた状況から「キューバ人＝スペイン人＝Dago」という連想が作用したことも想像に難くない。ジャーナリスト Riis は、ニューヨーク市内のスラム街回想録“The Passing of Cat Alley”を1898年に雑誌に寄稿している。その中で、Dago をスラム街の準最下層を構成する「好ましくない」、「軽蔑に値する」(despised) 集団として位置づける（167, 176）。Riis は Dago の人種属性については言及しない。Dago は、人種・国籍を超えた、〈侮蔑〉されるべき〈スラム街の厄介者〉的なイメージで当時の中産階級読者に理解されていたのかもしれない。なるほど、Crane もこのイメージの枠組みに倣う。“The Duel” と同年に書かれたペンシルベニアの炭鉱取材記事“In the Depths of a Coal Mine”の初稿で、作家は、「イタリア系移民」を「盗人」、「強盗」、「殺人犯」に喩える（8：606）。*Encyclopedia Britannica* の定義と同様に、イタリア系移民を、まっとうな社会生活を送ることのできない〈侮蔑〉に値する Dago と作家は見ている。一方で、Maggie におい

て、主要登場人物の1人 Pete の口を通して、“[D] at mug scrapped like a damn dago.” と、dago について作家は言及する（19 下線筆者）。Pete と喧嘩したこの人物は、dago という〈侮蔑〉の対象として読者の前に現れる。Maggie 中 dago が用いられるのはこの箇所のみで、これ以上の言及・説明はない。この人物の出自は問題にされず、この人物を貶める比喩形象として dago は機能する。

“dago” を作家自ら、全く別の場面・文脈で3年後に用いている。1897年、取材でギリシアに赴くことになったと友人に告げる Crane は、「ギリシア人」について、「外国語の軽蔑的な名称」を意味する“lingo”を話す“Dagoes”と、侮蔑的なニュアンスで語る（“Lingo”；Wertheim and Sorrentino：1994, 246）。とすれば、“The Duel”の中で Patsey を通してキューバ人に向けてくり返し用いられる Dago という蔑称、加えて〈軽蔑〉の気持ちをも含意する little (small) という語の多用、には意識するとしなやかにかかわらず作家自身のこのキューバ人登場人物に対する軽蔑的な人種観が投影されてもいたのではないだろうか。Patsey を通してキューバ人を例えば“little Dago”と〈二重〉の蔑称で呼び表す背景には、単なる物語的文脈を越えた当時の社会文化政治的文脈が潜んでいるように思われる。

関連して、このキューバ人が“little black Dago”というように、「黒色」(black) で表象されていることにも注目したい。なるほど、このキューバ人の顔は“olive face”と形容される（8：354）。OED によると、「オリーブ色」とは、“Dusky or brownish-yellow”を指す（“Olive-coloured”）。「(黄色交じりの) 皮膚の黒さ」が暗示され、「黒色」で形容されるこのキューバ人を、「黒人」、あるいは人種的にそれに近似した人物として作家が設定していたことをうかがわせる。1898年、キューバに赴いて取材した米西戦争記事において、「キューバ人兵士」は「黒人」(black)、それも「西インド諸島のニグロ」(West India negro) の典型であり、米国兵の「軽蔑」(contempt) の対象であると、Crane は書く。キューバ人は、“[A]t all times he [the average Cuban] gibbers.” と描写されもする（9：149, 163, 164 下線筆者）。gibber は、「猿などがキャッキョウ鳴く」という意味を有する（“Gibber”）。キューバ人はむしろ猿に近い存在とみなされる。Encyclopedia Britannica 第11版（1911）によると、「ニグロ」(“Negro”) は、「白人よりも劣る」、「類人猿」に近い「劣等」かつ「未開」の種族と定義づけられている（19：344-45）。このニグロ定義を反映したキューバ人像は、1901年の Minneapolis Tribune 紙に掲載された諷刺画からも見て取ることができる。キューバ人は、裸で猿に近い〈未開の黒人〉として図像化される。その際、戦後キューバの保護国化を推進した米国の軍政長官 Leonard Wood によってキューバ人が「石鹸」を使って「洗われて」いることにも注目したい（Pérez 163）。1895年に North American Review 誌に掲載された石鹸の広告は、「文明化」を石鹸はもたらすと謳う（Pears’ Soap 39）。米西戦争において、キューバ人はまさに後進の〈劣等ニグロ〉としてワズプから認識され、Crane も含めた当時の米国人にとって「文明化」されるべき対象として眼差

されていたわけである。

“The Duel” に登場する「キューバ人」も例外ではない。Patsey に対して激怒するこのキューバ人は、“replied savagely”、“with a savage joy”、“animal-like rage” と、く獸的な野蛮さを露わにする (8: 356, 357)。対照的なのが、偶然居合わせ、Patsey とキューバ人が口論を始めたのを見るやその仲裁に入る「2人の身だしなみのよい紳士」である。〈文明〉の象徴、ワスプの代表とも言える両紳士は、喧嘩をやめるよう Patsey とキューバ人の間に割って入る。その際、彼らのうちの1人は“one well-dressed man lecturing the Cuban” と、lecture を教授すべき対象としてキューバ人を見る。事実、キューバ人は、〈大人〉未満の「少年」(a lad) とのみなされている (8: 355, 356 下線筆者)。彼らが Patsey とキューバ人に対して行なう〈説得〉は、“palaver” と表現される。“palaver” は、*Encyclopedia Britannica* 第11版 (1911) によると、アフリカの「ニグロ」と外国人との間で行なわれる、「協議・交渉」を意味する商業語とされる (20: 596)。この語は、当時劣等人種とされた「ニグロ」との間で交わされる〈不平等〉な商業的協議または交渉として、世紀転換期において広く理解されていたと推察される。議論を「キューバ人」に絞るため、Patsey についての考察は省くが、2人の紳士とキューバ人の間には、〈説得〉という形を取った交渉、いやむしろ、lecture という語が含意する啓蒙の〈主体〉としての「紳士」(文明の象徴)、〈客体〉としての「キューバ人」(未開の象徴) とする、“palaver” という語を介してキューバ人をこれら紳士 (ワスプ) の下に据える序列化の構造が内在しているのである。

武藤脩二氏は、“The Duel” を論じた2005年の拙論を論評しつつ、このキューバ人が「黒」で表象されることの意義について言及する。その際、アイルランド系アメリカ人がしばしば「ブラック・アイリッシュ」というように「黒」色の属性を付与され蔑視されたこと、その理由としてアイルランド系アメリカ人(移民)が人種的に〈ブラック〉だったからではなく、「ニグロ=劣等」とする人種差別主義的等式の中で黒(ブラック)は白(ホワイト)の対極に位置する「最劣等」とされていたことの反映であるという当時の〈色のヒエラルキー〉を指摘する(2)。とするならば、テキスト上で「黒」で表象され「キューバ人」と一応は明示されるこの登場人物は必ずしも字義通り〈黒い血の入ったキューバ人〉である必要はないのではないだろうか。名前からしてアイルランド系移民と目される Patsey と異なり、キューバ人は素性を全く明かすことなく匿名のまま、一貫して単に「キューバ人」として読者の前に現れる(武藤1)。キューバ系移民である可能性についても肯定も否定も作家はしない。「2人の身だしなみのよい紳士」もまた匿名。ただし、後者はワスプに準ずる存在として理解され得る。では、前者は「キューバ人」という〈記号〉の裏にどのような属性を隠匿し、それをどの程度まで読み明かすことが許されるだろうか。鍵の1つは、反復される、「小さい」(little, small) というこのキューバ人の身体的特徴にあるように思う。

Encyclopedia Britannica 第11版(1911)の「日本人」(“Japanese”)の項を見ると、“The Japanese are of low stature as compared with the inhabitants of Western Europe [...]” また、“It is true that the Japanese are shorter in stature than either the Chinese or the Koreans.”とあり、日本人が西洋人はもとより他のアジア系の民族と比較して低身長であることが指摘されている(15: 164 下線筆者)。関連して、1人の日本人詩人がCraneに書き送った書簡を取り上げたい。1896年に「敬服」(admire)するCraneに宛てた書簡の中で、ヨネ・ノグチ(日本名は野口米次郎)は“I am Yone Noguchi, a little Japanese [...]”というように、「小さな日本人」(a little Japanese)と自己紹介をしている(Wertheim and Sorrentino: 1988, 259 下線筆者)⁶⁾。ノグチの場合、その文脈上、Craneに対して自分を卑下しているという可能性も捨て切れないが、*Encyclopedia Britannica*における日本人定義とともに「日本人＝低身長＝little」というステレオタイプの人種観の生成に一役買っていることは否定できまい。この等式の延長線上に、“The Duel”の同じく〈小柄〉な「キューバ人」登場人物を置くことはできないだろうか。

このキューバ人の顔は、作品中で「オリーブ色」をしていると説明されていた(8: 354)。オリーブ色が「黒色」以外に包含する、「黄色」のイメージからは〈黄色人種〉として一元的に捉えられていた、「日本人」を含むアジア系の民族が連想される。1898年の米西戦争取材記事の中で、Craneは「キューバ人兵士」を「西インド諸島のニグロ」に喩える(9: 149)。その5年前、1893年の雑誌記事には、“[T]o treat Japanese like West Indian negroes might be very dangerous.”という記述が見受けられる(Hearn 637 下線筆者)。日本人を「西インド諸島のニグロ」のように扱うのは危険だということだ。これは、当時の米国社会における「日本人＝西インド諸島のニグロ」アナロジーを浮かび上がらせる。さらに、「日本人＝キューバ人」という仮説を補強するための論拠として、“The Duel”の表題中の「決闘」(duel)という語、そしてその決闘に随するキューバ人描写、及び設定に着目したい。物語中、キューバ人がPatseyに求めるのは「剣による決闘」(a sword duel)であり、“[The Cuban] had all the quick, springy movements of a skillful swordsman.”と、キューバ人は「熟練した剣士」(a skillful swordsman)として描かれる。一方、Patseyは“sword”が何なのか知りもしない(8: 357 下線筆者)。「北斎」の芸術を読者に紹介し、それを賛美する1890年の雑誌記事は、“There are pages illustrating horses in action, and horsemanship, wrestlers, and swordsmen, and quarter-staff players, and duels with spears [...]”と、「果たし合い」(duel)と「(日本の) 武士」(swordsmen)について言及する(Winslow 355 下線筆者)。また、日本の風物を取り上げた1893年の雑誌記事は、“a nice old *samurai*, who wore, according to the fashion of the era, a queue and two swords”と、1人の「老サムライ」に焦点を当てる。そして、〈サムライ〉と「刀」(sword)、その老練した技術に対して、“[T]he old samurai, almost in the same moment, returned the blade to its sheath with the skill of a practiced swordsman [...]”と賛辞を送る(Hearn 636, 637 イタリアック原文、下線

筆者)。

先に見たように、1872年以來、日本への関心は米国内で高まりを見せた。1893年のシカゴ万博では「日本館」が話題を呼ぶ。翌1894年12月“The Duel”は発表される。同年9月には大方の予想を裏切り日清戦争における日本の勝利が確定的になっていた。米国人の日本に対する関心の膨れ上がりの程が予想できる。Patseyの滑稽にも思える「決闘」の内容についての無知蒙昧は、読者に対してこの「決闘」の説明が不要であることの裏返しとも取れる。この「決闘」が日本式の決闘である〈果たし合い〉をも含意することを当時の中産階級読者は大なり小なり理解していたのではなからうか。〈(日本式の)果たし合い〉としての「決闘」という暗示、「小柄なキューバ人」に付与された“a skillful swordsman”という比喻と日本の〈サムライ〉に特有の“the skill of a practiced swordsman”との表現の酷似から推して、このキューバ人登場人物がその裏で〈日本(サムライ)〉の記号としても機能し得たと解釈する余地があると言える⁷⁾。

とすれば、「キューバ人＝ニグロ＝日本人」という新たな等式がこの作品からは見えてくる。キューバ人をワズプの下に置く序列化はその一方で、日本人をワズプの下に置き直す再序列化の構造をも兼ねていたのである。作中、Patseyに向けられたキューバ人の怒りは“animal-like rage”と動物に喩えられる(8:357)。米西戦争の戦場でキューバ人は、gibberという動詞を付与されて「猿」扱いされる(9:164)。対して、1868年の雑誌記事中で、日本人はjabberという動詞と共に使われ同じく「猿」扱いされた(“A Visit”103)。関連して、1894年8月4日号のPunch誌掲載の日清戦争を題材とした諷刺画“The Corean Cock-Fight”では、日本人はサムライの甲冑をつけた「雄鶏」(cock)として戯画化される。また、同年9月29日号のPunch誌には“Jap the Giant-Killer”という題の諷刺画が掲載される(小池227,228)。諷刺画のモチーフは日清戦争における日本側の勝利確定である。Japという〈蔑称〉で呼ばれる、「巨人」とは対照的に〈小柄〉な日本(人)がサムライの甲冑をまとい拔身の刀を手にして、倒れた「巨人(中国)」の上に立つという構図が取られる。これらの諷刺画をCraneが同年12月“The Duel”執筆時に目にしていたかどうかは定かではない。しかし、日本美術の影響、ジャーナリズムを介して、日本(人)及び日清戦争を作家は〈知って〉いた可能性が高い。諷刺画が映し出す時代風潮の中で、大半の同時代米国人の反応と同じく、“The Duel”を書きながら、リアルタイムで日本(人)に対して、警戒心を強くしていたであろうことは想像の範疇に入れてよからう。

関連して、“The Duel”の結末部を見てみたい。表題が暗示する通り、決闘は結局行われぬ。キューバ人がホテルに「剣(刀)」(sword)を取りに行く直前、駆けつけた警官によって、決闘騒ぎに対してではなく警官に対して反抗的な態度を取ったとしてキューバ人は連行される。連行の直接の理由は、“It is none of your business.”と警官に向かってキューバ人が発言

したことによる（8：359 下線筆者）。直訳すると、「お前には関係ないことだ（放っておいてくれ）」という意味になるが、「商取引」をも含意する“business”という語が使われていることは見逃せない。しかも、警官は“He had a distinctly business air.”と描写されもする（8：359 下線筆者）。この警官が「商売人」という記号を持ち合わせていることを暗示している。1896年と1899年の雑誌記事の表題が示唆するように、米国は19世紀末に向かって、日本・中国を筆頭とする東アジアに強い interest、すなわち〈利益を当て込んだ関心〉を寄せていた。この種の〈関心〉が唐突に出現するはずはない。1896年以前から米国社会の中で熟成されつつあったと考える方が自然であろう。そこで、1894年の“The Duel”における palaver、business、そしてキューバ人の背後に見え隠れする〈日本の影〉である。ちなみに、警官によって連行されるのはこのキューバ人のみ。Patsey にはお咎めなし。「警官」は、〈国家権力〉の象徴としても見るのが可能だろう。新興国日本は Punch 誌の諷刺画が示すように、刀を〈抜く〉ことで中国を倒した。“The Duel”の物語設定の眼目は決闘を完遂させないこと、刀を抜く前に米国の国家権力の管理下に「キューバ人＝日本人」を置くことにあったのだと言える。ニューヨーク市内のスラム街にある中国系移民共同体を取材した1896年の新聞記事の中で、Crane は、“As the pipe passes and passes around the circle, the voices drop to a mere indolent cooing [...]”と、「アヘン」を回し飲みしている中国系移民たちが発する声を「怠惰な鳩の鳴き声」(indolent cooing) に喩える（8：368-69 下線筆者）。中国人もまた、作家によって、人間未満の〈動物〉としてワスプの下位に〈侮蔑〉的に置かれる。“The Duel”の結末は、「日本人＝猿」、「キューバ人＝猿」、「中国人＝鳩」という三者のイメージ混在の中で、日本を開国させ、〈文明化〉してきた米国（西洋）が再び自分たちに有利なように日本（人）をきたるべき「市場」（ビジネス）争いにおいても〈管理〉しようとする試み、言い換えると、〈ビジネス〉という文脈における〈ワスプ中心主義〉的な階層構造を孕んだ“palaver”の延長としても見ることができよう。

日清戦争を経て、“Japan has leaped, almost at one bound, to a place among the great nations of the earth.”と、1895年、米国海軍長官 Hilary A. Herbert は述べる（685 下線筆者）。“has leaped”という現在完了が示唆するように、日本は列強国の一員に昇格し、依然としてその地位に留まっていることが強調される。しかも、“at one bound”という表現に顕著なように、驚くべき「一跳ね」でその地位にのし上がったのである。翌年、駐シャム米国公使 John Barrett は日本について、“Japan has on foot gigantic schemes for the further improvement of her land and people [...]”と言う（265 下線筆者）。比喩的に「立ち上がった」(on foot)、形容詞“gigantic”に暗示される〈巨人〉(giant)に日本は他ならない。米国文明によって〈開かれ〉た日本は今や米国の予想を超えた脅威の対象となるほどに「覚醒」(awakened)してしまった。Herbert や Barrett の懸念を先取りする形で、その日本を米国にとって安全に〈再回収〉する試み

の1つ、反日・ワスプ寄りの同時代的な諸々の言説と緊密な関係にある政治的なテキストとして“The Duel”は再解釈が可能なのである。ただし、“The Duel”というテキストには「日本(人)」という語は一度も登場しない。「キューバ人」登場人物という〈記号〉の中に埋め込まれた諸々のコードを読み解くというプロセスを経由して迂言的に「日本(人)」に言及するという〈戦略〉を作家は取る。ワスプ体制派側からの社会文化政治的要請に同調・共振・依存し、人種差別主義的な〈反日感情〉に肩入れしつつも、それを表立って表現することの出来ない作家のジレンマ。「日本(人)=日系移民」に対して正(驚異)/負(脅威)の感情で〈揺れる〉作家の心の葛藤を、同時にこの戦略は皮肉にも露呈しているのではないだろうか。

お わ り に

これまで検証してきたように、伝記的に見ても Crane と日本(人)との接点は皆無ではなかった。作家は、19世紀末ニューヨーク市内のスラム街とそこで生活を営む移民たちに焦点を当てた作品を数多く残している。しかし、自作品において、中国(人)ないしは中国系移民は取り上げられるものの、その一方で日本(人)あるいは日系移民にスポットライトを当てる作品は筆者が知り得る限り存在しない。小論で取り上げた、作品舞台の背景に置かれたせいぜい数点の小道具(「日本の凧」、「着色石版刷りの絵」)にとどまっている。今回の論考、“The Duel”再解釈を中心にした、作家と「日本(人)」との関係の再考を通じて、19世紀末米国社会における〈日本(人)〉イメージの抽出のみならず、作家の〈移民〉表象における新しい視座の設定、作品解釈の新たな地平の広がり、多層的な Crane 像のさらなる掘り起こしが期待される。

注

本稿は、平成20年度科学研究費補助金・基盤研究(C)・研究課題「19世紀末から20世紀初頭の英独仏米における日本像の比較研究」(研究代表者: 追手門学院大学・水藤龍彦教授)による研究成果の一部である。

- 1) 『アメリカス世界のなかの「帝国」』(2005)所収の拙論「スティーヴン・クレインの描くニューヨークとキューバ人—『行われなかった決闘』に見る帝国主義イデオロギー」の中で、例えば、筆者は、Craneが当時の「帝国主義」・「人種差別主義」の影響から免れておらず、作家の立場が「アンチ移民=ワスプ寄り」であることを論証した(増崎 140-52)。小論は、この研究論文の成果を踏まえつつ、〈作家による日本(人)表象〉という新視点を加える試みでもある。
- 2) 1985年の『英語青年』所収の常松正雄氏による論評「ヨネ・ノグチとスティーヴン・クレイン」を除いて、〈Craneと日本(人)〉の関係を取り上げた研究はほとんど見当たらないように思われる。
- 3) 小論中、人種問題を取り上げる際に、今日では社会的差別につながる恐れのある語句が用いられている箇所がある。歴史的・文化的に19世紀末の米国における〈日本(人)〉イメージを再検討する

際に必要な歴史資料中の用語としてあえて元の形のまま用いる。

- 4) Crane は、*Maggie* の中に、“[Jimmie] had been arrested for assaulting a Chinaman.” と、*Maggie* の兄 Jimmie と「1人の中国人」(a Chinaman)をめぐる逸話を挿入している(16)。また、1896年発表の新聞記事“Opium’s Varied Dreams”において、「アヘン」と「中国(人)」を焦点化する。作家の中国(人)に対する関心の高さがうかがえる。
- 5) *Maggie* が1896年に再版された際、作家は出版社の要請を受け入れていくつかの表現を変更し、読者に不快感を与えそうな箇所を削除して、1893年の版に手直しをしている(フランチャアー 154)。しかし、「日本の凧」(Japanese kite)の箇所には何の加筆修正も作家によってなされていない(Crane: *Maggie* 24)。
- 6) 野口米次郎(1875–1947)。愛知県生まれの詩人。慶応義塾を中退、1893年に渡米。苦学の末、英語の詩集 *Seen and Unseen* を1896年にヨネ・ノグチ(Yone Noguchi)名義で刊行して注目される(斎藤ほか 364)。常松氏は、渡米中の野口がCraneに書き送った1896年の書簡について言及している。常松氏の見解によると、この書簡をCraneが実際に読んだかどうかは極めて疑わしく、また不幸にして野口とCraneは出会うことはなかった。出会ってれば米国詩壇に少なからぬ影響を与えただろうと、常松氏は遺憾の意を表す(530–31)。
- 7) このキューバ人登場人物は、作中で「2人の身だしなみのよい紳士」の1人から、“a fencer”と呼ばれる。字義的には、彼は「フェンシング選手」の「キューバ人」として読者の前に呈示される(8: 357)。

引用文献

- Anbinder, Tyler. *Five Points: The 19th-Century New York City Neighborhood That Invented Tap Dance, Stole Elections, and Became the World’s Most Notorious Slum*. New York: Plume, 2001.
- Appelbaum, Stanley. *The Chicago World’s Fair of 1893: A Photographic Record*. New York: Dover, 1980.
- “Awakened Japan.” *Scribner’s Monthly* 3 (1872): 669–72.
- Barrett, John. “America’s Interest in Eastern Asia.” *North American Review* 162 (1896): 257–65.
- Bellamy, Edward. *Looking Backward, 2000–1887*. 1888. New York: Penguin, 1986.
- “The Break-Up of China, and Our Interest in It.” *Atlantic Monthly* 84 (1899): 276–80.
- “Chinaman.” 1881. *The Unabridged Devil’s Dictionary*. By Ambrose Bierce. Ed. David E. Schultz and S. T. Joshi. Athens: U of Georgia P, 2000. 35.
- Crane, Stephen. *Maggie: A Girl of the Streets*. 1893. Ed. Thomas A. Gullason. New York: Norton, 1979.
- . *The University of Virginia Edition of the Works of Stephen Crane*. Ed. Fredson Bowers. 10 vols. Charlottesville: UP of Virginia, 1969–76.
- “Dago.” *The Encyclopedia Britannica*. 11th ed. 1910.
- “Editor’s Drawer.” *Harper’s New Monthly Magazine* 60 (1880): 636–40.
- “Editor’s Study.” *Harper’s New Monthly Magazine* 87 (1893): 798–802.
- Fenollosa, Ernest Francisco. “Chinese and Japanese Traits.” *Atlantic Monthly* 69 (1892): 769–74.
- “Gibber.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Clarendon, 1989.
- Gibson, Donald B. *The Fiction of Stephen Crane*. Carbondale: Southern Illinois UP, 1968.
- Hearn, Lafcadio. “Japanese Smile.” *Atlantic Monthly* 71 (1893): 634–46.
- Herbert, Hilary A. “Military Lessons of the Chino-Japanese War.” *North American Review* 160 (1895): 685–98.
- Ireland, Alleyne. “Commercial Aspect of the Yellow Peril.” *North American Review* 171 (1900): 389–400.
- “Jabber.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford: Clarendon, 1989.

- “Jap.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford : Clarendon, 1989.
- “Japanese.” *The Encyclopedia Britannica*. 11th ed. 1911.
- “Lingo.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford : Clarendon, 1989.
- Nagel, James. *Stephen Crane and Literary Impressionism*. University Park : The Pennsylvania State UP, 1980.
- “Negro.” *The Encyclopedia Britannica*. 11th ed. 1911.
- “Olive.” *Longman Advanced American Dictionary*. 2nd ed. Harlow : Longman, 2007.
- “Olive-coloured.” *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford : Clarendon, 1989.
- “Palaver.” *The Encyclopedia Britannica*. 11th ed. 1911.
- Pears’ Soap. Advertisement. *North American Review Advertiser* 160 (1895) : 39.
- Pérez, Louis A., Jr. “Cuba : The Platt Amendment.” 1988. *Imperial Surge : The United States Abroad, the 1890s-Early 1900s*. Ed. Thomas G. Paterson and Stephen G. Rabe. Lexington : D. C. Heath, 1992. 153–71.
- Rev. of *The Natural History of Society in the Barbarous and Civilized State : An Essay toward Discovering the Origin and Course of Human Improvement*, by W. Cooke Taylor. *United States Democratic Review* 9 (1841) : 401–02.
- Riis, Jacob A. *How the Other Half Lives*. 1890. New York : Dover, 1971.
- . “The Passing of Cat Alley.” *Century* 57 (1898) : 166–76.
- Rydell, Robert W. *All the World’s a Fair*. Chicago : U of Chicago P, 1984.
- “Side Shows at the World’s Fair.” *Manufacturer and Builder* 25 (1893) : 155.
- “A Visit to Yedo.” *Putman’s Magazine of American Literature, Science and Art* 12 (1868) : 103–06.
- Waern, Cecilia. “Some Notes on French Impressionism.” *Atlantic Monthly* 69 (1892) : 535–41.
- Wertheim, Stanley. *A Stephen Crane Encyclopedia*. Westport : Greenwood, 1997.
- Wertheim, Stanley, and Paul Sorrentino, eds. *The Correspondence of Stephen Crane*. 2 vols. New York : Columbia UP, 1988.
- . *The Crane Log : A Documentary Life of Stephen Crane, 1871–1900*. New York : G. K. Hall, 1994.
- Winslow, W. Henry. “Japanese Popular Art and Sketch-Books.” *New England Magazine* 9 (1890) : 348–61.
- 飯倉章『イエロー・ベリルの神話—帝国日本と「黄禍」の逆説』東京：彩流社、2004。
- 大井浩二『ホワイト・シティの幻影—シカゴ万国博覧会とアメリカ的想像力』東京：研究社、1993。
- 大島清次『ジャポニスム—印象派と浮世絵の周辺』東京：講談社、1992。
- 押谷善一郎『ステイーヴン・クレインの眼』大阪：大阪教育図書、1995。
- グリーン、ナンシー『多民族の国アメリカ—移民たちの歴史』村上伸子訳 大阪：創元社、1997。
- 小池滋編『ヴィクトリアン・パンチ—画像資料で読む 19 世紀世界 1841–1901』第 6 巻 東京：柏書房、1996。
- ゴルヴィツァー、ハインツ『黄禍論とは何か』瀬野文教訳 東京：草思社、1999。
- 斎藤真ほか『アメリカを知る事典』東京：平凡社、2000。
- 常松正雄「ヨネ・ノグチとステイーヴン・クレイン」『英語青年』研究社、第 130 卷 11 号、1985 年、530–32。
- 橋川文三『黄禍物語』東京：岩波書店、2000。
- フランチアー、ルース『ステイーヴン・クレイン物語—波乱に富んだ奇才の半生』押谷善一郎、久我俊二訳 大阪：大阪教育図書、1991。
- 増崎恒「ステイーヴン・クレインの描くニューヨークとキューバ人—『行われなかった決闘』に見る帝国主義イデオロギー」 島田真杉ほか『アメリカス世界のなかの「帝国」』大阪：むさし書房、2005。140–52。

Stephen Crane の作品に見る〈日本（人）〉イメージ

馬淵明子『ジャポニスムー幻想の日本』東京：ブリュッケ、2004。

武藤脩二「キューバ人＝ニグロ＝猿＝アイリッシュ＝『考える人』」『The Americas Today』天理大学アメリカス学会ニューズレター 天理大学アメリカス学会、第 54 号、2006 年、1-3。